

# ジャワ島の旅 — ジャワ更紗・ボロブドールそして日食 —

科学ジャーナリスト 佐藤寿治

## 1. ジャワの第一夜

6月のインドネシアは、ドライシーズンのまっただなかである。そう聞いて、6月12日11時20分成田発、インドネシア国営航空ガルーダ873便に乗り込んだ。機種はDC-10。途中気流の悪いところもなく、快適な空の旅を7時間 —ただしインドネシアと日本の2時間の時差のため、時計上は5時間—、ジャカルタハリム国際空港への到着の案内で、軽い眠りのなかから、機上の人にもどった。窓の外に目をやると、幾重にも重なるよく発達した入道雲が、初めての旅人を歓迎するかのように、ちょっと頭を下げている。おおトロピカルなんて、おどけているうちに、飛行機は着陸態勢に入り、どんどん高度を下げ、箱庭のような街並が、その本来のサイズに感じられたところで、無事着陸。さあてと気負い込んで、座席から立ち上って、周囲を見回すと、ジャカルタで降りると、ぜんぜん雰囲気の違いがある。全員のんびりムード、なかにはまわりのことなど意識のなかになく、全く二人だけの幸福に浸っているカップルもいる。時差ボケか、眠けボケか、よく考えてみれば、何の不思議もないこと。873便は、さらにバリ島のデンパサール空港へ向うのであった。幸福カップルのなかには、バリ島ハネムーンの関根恵子という女優さんが混っていた。—しかし、この事実は、日本に帰ってから女性週刊紙の記事で知った。—

ジャカルタの気温31度。天気は晴れているが、空一面に薄いベールをしきつめたようで、ぬけるような空ではない。こんなことを話しながら、空港に出迎えてくれた、インドネシアで最も長い経歴を持つ、旅行エージェント・ニトウールのアムソリ氏と、制限速度60Kmのところを80Kmの速度で、しかも東京にも劣らない夕方のラッシュのなかをつっ走る車でホテルにむかった。ニトウールのアムソリ氏はなかなかの日本語の使い手で、インドネシアのことで、いろいろ教えてもらうのに大いに助かった。



ジャカルタの街並

ホテルで旅の荷をほどいて、東京に国際電話をし — 6分間で8千円 — 、アムソリ氏が自分のオートバイで週末の人出でにぎわう、ジャカルタの街を案内してくれるというので、夜の街にくり出す。ナイト・ツアー・オブ・ジャカルタ。果物や飲食物、そして衣類を売る夜台がビッシリと並ぶマーケットやチャイナタウン 深夜まで大勢の人が集まっている遊園地など、ほこりと車の排気

ガスで顔を真黒にしながら駆け回った。いいかげん腹がすいたので、バイク風インドネシア料理のレストランへ遅夕食に入る。腹いっぱい食べて、料金を払ってホテルへ帰るつもりになっていると、アムソリ氏おもしろいところがあるので、もう一度オートバイで回ろうという。インドネシア時間の11時。日本時間の午前1時。私の体はもう動き回る活気を完全に失ってしまっていた。しかし、ここまでつき合ったら、ことわるわけにも行かず、OKどこでもいぞとオートバイにまたがる。外はさわやかな心地よい夜風が吹いている。宵に南に高かったみなみじゅうじが、西に傾きビルの間に見えかくれしている。うん、なるほど、これがドライシーズンなんだと、ひょんなどころで実感しているうち、あまり人通りのない通りの歩道に近くオートバイが速度を落して走っている。周囲からもれてくる光りで、適当な間隔を置いて、人が2、3人ずつ立っているのが見える。ちょっとみると、スカートをはいている人、ホットパンツ姿の人とほとんどの人が女性ようである。案内のアムソリ氏が「佐藤さんあの人達よく見てください。おもしろいよ」という。オートバイのライトで、正体の見きわめが可能になったので、よく見ると、腕にカゴブ、足にはスネ毛、疑いもなく男だ。だがまてよ顔を見ると入念に化粧をした女ではないか。きょとんとして見とれていた私に、アムソリ氏が笑いながら「おかまですよ」といった。

こうしてジャワ島の第一夜は、私をキョロキョロさせ、ほどほどのカルチャー・ショックを与えて過ぎて行った。

翌日曜日、インドネシア文化にアタック。国立科学博物館や国営ジャワ更紗工場を前日のオートバイではなく、オプレットという小型乗り合田舎のバスやヘリチャという二人乗り三輪車やそしてベチャという人力車などの庶民の足を利用して見て回った。夜は、南国の空を見にピンビアンプラネタリウムに出かける。残念ながらプラネタリウムの星空解



説で聞きとれたインドネシア語は、インドネシアの庶民の足 — オート三輪ヘリチャ —  
ピンタン＝星＝とマタハリ＝太陽＝だけで、今度来るまでには、インドネシア語のボキャブラリーをふやすと、心に固くちかった。

## 2. ボッシャ天文台訪問

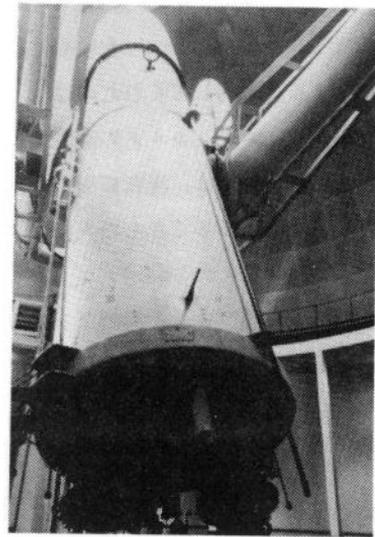
今回の私のジャワ島の旅の目的は二つあった。一つは、83年ジャワ日食の現地調査と、インドネシア国立ボッシャ天文台の訪問である。インドネシアについて4日目、東京天文台の北村正利教授の紹介状を持参して、バンバン・ヒダヤット台長との約束の時間、12時に遅れな

いように、ホテルを出発した。

ポッシャ天文台は、“バンドン会議”で有名なバンドン市から車で、40分ほどの郊外の町レ  
ンバンにある。資金は、茶園の経営で財を成したオランダ人のカーレル・アルベルト・ルドルフ  
・ポッシャ氏が出し、1923年に作られた。メイン望遠鏡は、カール・ツァイス製60cmダブル  
リフラクターである。この望遠鏡を使つての観測は、元東京天文台長の宮地政司先生が、台長  
として指導されたという歴史も残されている。

第二次世界大戦後は、ユネスコのカークホーヘン  
財団の援助により、51cmシュミット・カメラも  
据え付けられ赤道帯に位置するという、他の利を  
充分に生かした観測 — 特にダブル・スターや変  
光星 — に成果を上げている。

ヒダヤット台長に、来年の日食についてのイン  
ドネシア側の事情や天文台の現状などについてな  
にやかやとどたどしい英語で質問し、合せてイン  
ドネシア科学委員会のジャワ日食についての資  
料などをちょうだいした。さらにヒダヤット台長  
のとり計らいで、若い研究者とオペレーターの人  
がついて天文台内をこまかに案内してくれた。印  
象に残っているのは、なんとといっても60cmのメ  
イン望遠鏡で、二人がかりの手動操作で動くとい  
う時代のものであるが、対物レンズを固定している木枠といい、どこもピッカ・ピカにみがかれ、  
人馬ならぬ人鏡一体で活躍しているのが感じとれる。



ポッシャ天文台  
60cmダブルリフラクター(ツァイス製)

60cm鏡のドームのテラスから見る風景は、ポッシャ氏の時代そのままに茶畑が続き素晴らしいスカイラインを見せている。残念だったのは、近くで活動を続ける火山からの灰のために、夜間観測の様子を見ることができなかったことである。

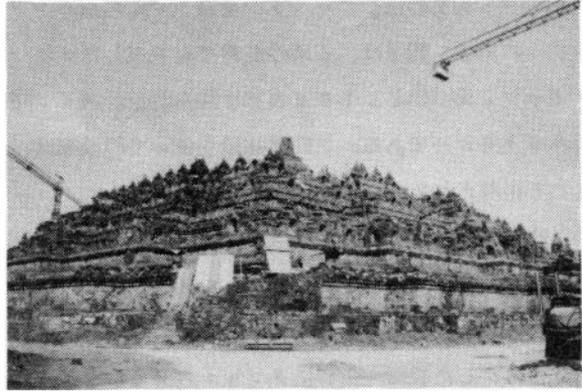
天文台からバンドンの街にもどって、ジョクジャカルタへ向う夜行特急列車に乗るまでの間、  
バンドンの街をぶらつく。道端にはいたるところ火山灰の吹だまりができ、街中がどこもほこり  
っぽい。ちょうどスーパーストアの前に来たとき、当然 ビールのことを思い出す。インドネシア  
には、二つのビールの銘柄があり、その一つがビンタン・ビールという。これを思い出し、どんな  
ものか味見がしたくなり、大ビンと小ビンを買って次の列車の旅のはなむけに盃を傾ける。う  
んなかなかのもの。

### 3. 文化都市ジョクジャカルタ

83年ジャワ日食の主要観測地、ジョクジャカルタについたのは、まだ夜も明けやらぬ午前4  
時。駅前でタクシーをひろって、ホテルへ向う。ホテルは、1年後に多くの日本人でにぎわうは

ずの、アンバルクモ・シェラトン・ホテル。正面のたたずまいといい、フロントでの対応にしても、国際ホテルとしての風格を十分にそなえているホテルである。

ジョクジャカルタでは、世界最大の仏教遺跡ポロブドール——皆既中心帯のほぼ真下にあたる——を中心に調査をする。案内してくれたのはニトウールジョクジャカルタの支店長氏。ポロブドールは、現在修復中



ポロブドール

で日食の時に訪れる多くさんの人には、本来の姿を見せるべき工事が進められている。展示会などで日本でも知る人の多いポロブドールは、写真で見るより、実物のほうがはるかによく、日食との組み合わせも間違いなく絵になるものです。ジョクジャカルタは、ほかにも多くの遺跡や、シャドウ・プレイに代表されるジャワの伝統文化に接触するのにもってこいのところ。土産にしても、シャドウ・プレイの人形、銀製品、ジャワ更紗などがとても手頃な価格で買うことができる。なんといっても出かけるものにとってありがたいのは、安全な街であること——ただし土産売りは、だいぶ食いさがるのがいて、「だんなさん、安いよ安いよ」とついでくるものがある——である。食べものも、ホテル以外でも、焼メシ、焼ソバの類ならそれほど問題なく、どなたも食べられるはず、そのうえ安い。気候はドライシーズン、観測地もよし、83年の日食は、まれに見る不安の少ない日食観測となる。